

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

人間の傷つきやすさ＜共同研究： 被傷性の人類学／人間学＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2022-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹沢, 尚一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009884

人間の傷つきやすさ

竹沢 尚一郎

人は誰も平穏で安心できる生活を望むだろう。しかし、私たちの生は苦痛や苦難をもたらす出来事に満ちている。戦争、災害、内戦、疫病、事故、癌、身近な存在の死。これらの出来事は私たちを傷つけ、失意と不安のなかへ私たちを導くのである。

私は東日本大震災の翌月から被災地に行き、支援をしながら研究をおこなった。話を聞いたのは300人ほどになるが、もっとも痛ましいのは子を亡くした人びとの語りだった。ある女性は、自分の近くにとどまるために役場に勤めていた幼子のいる娘を津波で亡くしていた。「なんで私だけ助かったんだろうね。私が代わりに逝ったらよかったのに」。会うたびにそう口にしていた彼女の引きつった顔は今も目に浮かんでくる。

震災は原子力発電所の重大事故も引き起こし、放射能汚染を逃れるために十数万人が避難し、今も4万人が避難生活をつづけている。ある女性は私たちのアンケートにこう書いている。「原発事故後、妊婦の不安は計り知れないものでした。初産だったこともあり、毎晩、眠れない夜が続きました。国民の不安を守ることが、国の一番の仕事だと今でも思っています。子どもの未来を大事にできる国になって欲しいと思います」。

本研究の出発点は、人間とは傷つきやすい存在であること、文化とは人間の傷つきやすさに抗するために作られた構築物と見なしうることであり、なぜこのような研究が必要なのかは、この半世紀あまりの世界の変化と文化人類学の変容を見れば首肯できるだろう。

他者の文化の研究から被傷性の人間性の研究へ

文化人類学は19世紀のなかばに、近代化に成功した国々で誕生した。それらの国々は経済発展を謳歌すると同時に、植民地の拡張につとめた。その過程で、異質な文化をもつ人びとの出会いが増え、「他者の文化の学」としての文化人類学の発展が要請された。異質な文化を研究するために自文化の枠組みを適応することは忌避され、フィールドワークと相対主義が文化人類学の金科玉条となったのだ。

しかし、この半世紀のあいだにグローバル化が止めどなく進行し、世界は大きく姿を変えた。文化の衝突ではなく文化の均質化が進み、境界は障壁ではなくむしろ利潤の源泉にな

った。過去には、人類学者は無邪気に「貧困」は他者のものであり、疫病はマラリアや天然痘がそうであるように発展途上国の病気だと信じていた。しかし今や、産業の移転と空洞化によって失業や貧困はどこでも見られるようになり、疾病はコロナ禍に代表されるようにすべての国・人びとが直面する現実となったのである。

ピエール・ブルデューが1993年にフランスの市民を対象にインタビューをおこない、『世界の悲惨』(藤原書店 2019-20)を書いたのはこうした問題関心からであった。彼は1973年(原著 1977年)の『資本主義のハビトゥス』(藤原書店)では、アルジェリアの人びとがなぜ近代化に成功しないかを彼らの思考様式や行動様式で説明していた。オスカー・ルイスのように、他者の貧困には固有の論理があると考えていたのである。ところがその20年後に彼の関心は自国に向かい、貧困や疎外に苦しむ人びとを論ずるようになったのである。

人類学の領域でもおなじ傾向が見られている。ブルデューと同時期にジョン・デイヴィスは、従来の安定した社会組織や文化構造の研究に加え、戦争や疾病や災害に襲われた人びとの人類学、彼のいう「苦難の人類学」が必要であると説いた(Davis 1992)。難民や移民、貧困、疾病、戦争被害者、性暴力被害者、高齢者、障がい者といった、困難を抱えた人びと、傷つきやすい状態にある人びとに関する研究が増えたのはその頃であり、それを受けてシェリー・オートナーは2016年に「暗い人類学」が現代人類学の主流になっていると断言した(Ortner 2016)。それと前後して、英国のジョエル・ロビンスは、人類学の中心的関心が異文化の理解から「苦悩への傷つきやすさ(被傷性)を共有することで結びつけられている人間共通の性質(humanity)」を理解することへ移ったと述べている(Robbins 2013)。

本共同研究のねらい

本共同研究会が、戦争、内戦、災害、貧困、障がい、疾病、うつ、マイノリティ、暴力などをテーマとする研究者からなっているのはこうした背景からである。研究会を遂行するにあたり、さしあたりいくつかの課題が考えられる(もっと増えていくはずだ)。

第1に、これらの事象が人びとの生活にどう影響しているか、人びとがそれにどう対応しているかを、現場から明らかにしていくことである。共同研究者のひとりである森田良成は、

竹沢 尚一郎 (たけざわ しょういちろう)

国立民族学博物館名誉教授

専門はアフリカ史と災害人類学。著書に、『被災後を生きる一吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』(中央公論新社 2013年)、『文化人類学のエッセンス—世界をみる／変える』(共編著 有斐閣 2021年)、『原発事故避難者はどう生きてきたか—被傷性の人類学』(東信堂 2022年)、『*The Aftermath of the 2011 East Japan Earthquake and Tsunami: Living among the Rubble* (Translated by P. Barton, Lexington Books 2016) など。

インドネシアの西ティモール州で廃品回収に従事している出稼ぎ者を調査しているが、彼らは「自分たちには金はないが、他は何でもある」とあっけらかんと話すという。故郷の村には住むところがあり、共同で儀礼をおこない、語り合う仲間がいるためである。そうしたあり方は、将来の見通しのなさに苦しむわが国の非正規雇用労働者とは大きく違っているに違いない。事実を追いながら、何をもちて貧困というか。そもそも貧困という概念は適切なのかを検討していくことが必要なのである。

第2に、傷つきやすさや生のあやうさは不平等な仕方で割り振られていることに着目することである。コロナ禍は私たちに社会的経済的困難を課したが、それがもっとも影響を与えたのは、小さな子どもを抱える母子家庭であり、非正規労働者であり、真っ先に首を切られた外国人労働者であった。また、コロナ禍と戦う最前線にいるケア労働者の多くは、欧米諸国では移民や外国人労働者であり、彼らのもとの感染リスクが他より一段と高いことは報道等で伝えられている。人びとが抱える苦難やあやうさの記述は、苦難やあやうさを不平等に生み出すメカニズムの分析をとまなわなければ片手落ちであろう。

第3に、人間は被傷性の状態を避けようとするだけでなく、ときにそれを積極的に受け入れ、みずからをそれへ開いていく存在だということである。そのことは、成人儀礼などの複数の儀礼が身体損傷や苦痛を課すこと、そしてある種の苦痛を与えるアートが作られていることに示されている。それらの場や作品に接するとき、私たちは自我意識と日々の生活の配慮から外へと引きずり出され、他者との(それは人間でもあれば自然ないし宇宙でもある)直接的な接触・交流へと開かれていく。そうした状態を、ヴィクター・ターナーは『儀礼の過程』(思索社、1976年)で「コムニタス」と呼び、ジョルジュ・バタイユは『内的体験』(現代思潮社、1970年)において「交感」「内的体験」と呼んだが、それを研究することもまた本研究の課題である。

これらの儀礼やアートの存在は私たちを別な問いへと導くだろう。なぜ私たち自身を切

り裂くことが、他者との真の交流のためには必要なのか。秩序や日常性の側からではなく、傷ついた存在としてのあり方から見ていくとき世界はどう見えるのか。福祉、ケア、配慮、カウンセリングなど、傷つきやすい状態にある人びとへの対処法の研究は無数にあるが、傷ついた状態にある人びとが何を考え、どう生きているかを知るための手段を私たちはもっているのだろうか。

本研究会は、人間の被傷性への向きあいをさまざまな角度から考察しようとするので、文化人類学者だけでなく、アート、社会福祉学、臨床心理学、宗教学など、異分野の研究者にも参加を願っている。「被傷性の人類学／人間学」と称したのはそれが理由である。

引用文献

- Davis, J. 1992 The Anthropology of Suffering. *Journal of Refugee Studies* 5(2): 149-161.
- Ortner, S. 2016 Dark Anthropology and Its Others: Theory since the Eighties. *HAU: Journal of Ethnographic Theory* 6(1): 47-73.
- Robbins, J. 2013 Beyond the Suffering Subject: Toward an Anthropology of the Good. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 19: 447-462.



東日本大震災の翌日の岩手県大槌町
電線は垂れ下がり、地面は地盤沈下して海水が入り、いたるところで燃え続けている (2011年3月12日、小川芳春撮影)。